

For Conscience' Sake の諸相

大 桃 道 幸

(2007年9月30日受付, 2007年12月10日受理)

要旨: 英国の小説家・詩人 Thomas Hardy の短編小説 *For Conscience' Sake* は、20年前に捨てた女性を探し出し、彼女と結婚することで、過去の過ちを正そうとする男の物語である。この作品は題名にある〈良心〉の問題がテーマであると簡単に理解され、物語の筋立ても比較的単純であることから、従来あまり研究されてこなかった。しかし、丁寧に吟味してみると、この作品には良心の問題以外に、孤独、女性の自立、階級意識、〈農村〉対〈都会〉、更には遺伝などのテーマやモチーフが巧みに織り込まれていることが分かる。その意味で、本作品は Hardy の長編小説の要素が凝縮されていると言って良く、Hardy の長編小説を理解する上でも、本作品の理解は非常に有益であると言えよう。また、主人公の Millborne が最後に達する諦観の境地は、作者自身の心情を反映したものであるであろう。

キーワード: 良心, 孤独, 階級意識, 結婚, 都会

I はじめに

イギリスの小説家・詩人 Thomas Hardy (1840—1928) の短編小説 *For Conscience' Sake* は1891年3月、*The Fortnightly Review* に掲載され、その後短編小説集 *Life's Little Ironies* に収録されて、1894年2月22日に Osgood, McIlvaine 社から出版された。¹⁾ *Life's Little Ironies* に含まれている作品群は、いずれも Hardy の小説家としての円熟期に書かれたもので、傑作揃いであり、本邦でも英文テキストとして或いは翻訳により広く読まれてきた。しかし、*For Conscience' Sake* を含め、Hardy の短編小説は研究の対象としては一般に軽く扱われがちで、実際、国内外を問わず、長編小説に比べると本格的な研究は極めて微々たるものであると言って良い。

For Conscience' Sake は New Wessex 版 (ハードカバー) で僅か15頁の短編小説で、物語も比較的単純で分かり易い。しかし本作品を含め、Hardy が小説家としての円熟期に書いた短編小説の多くは、同時期に書かれた長編小説に共通するテーマや問題を扱っている場合が多く、彼の長編小説のエッセンスが盛り込まれていると言える。その意味で、Hardy の短編小説を十分に吟味検討することは、Hardy の文学をより深く理解する上で、非常に有意義であろう。本稿では *For Conscience' Sake* を様々な角度から検討し、従来見落

とされてきた側面に焦点を当てながら、作品の特質と意義を探ってみたい。最初に、本論の理解を助けるために、物語の梗概を記すことにする。

II 物語の梗概

初老の独身男性 Millborne は、Wessex 地方の出身で、若い時に London にやって来て銀行に勤務していたが、父親の死後遺産を相続して早々と現役を退き、今は悠々自適の生活を送っている。或る晩、彼はかかりつけの Bindon 医師に悩みを打ち明ける。20年前、彼には故郷で結婚の約束をして子供までもうけた女性があったが、その約束を果たすことなく今日に至っている。最近では良心 (conscience) の呵責に耐えられず、彼女を捜し出して、昔の約束を果たしたいと言うのである。Bindon 医師の助言は、20年前の事だから、何もしない方が良いというものだった。

Bindon 医師の助言に反して、Millborne はかつて自分が裏切った女性を捜し始める。Exonbury という町に赴いた Millborne は、その女性が Mrs Leonora Frankland という名で、音楽とダンスの教師をしていることを知る。彼は昔の約束を果たすために、彼女に結婚を申し込むが、断られる。Millborne の執拗な求婚を頑なに拒んでいた Mrs Frankland であったが、彼との結婚が自分と娘 Frances の社会的地位を高め、

娘と若い牧師補Mr Copeとの縁談を進める上で有利に働くと言われて、ついに彼との結婚に同意する。

Millborne と Mrs Frankland は結婚後、London に居を構え、Frances と共に暮らすようになる。二人の過去の関係や Millborne が彼女の本当の父親であることは、Frances には秘密にされ、Millborne は Mrs Frankland の古い友人だったことにされた。

London に落ち着いて約一ヶ月後、一家は Wight 島の海水浴場で一週間の休暇を過ごすことになった。彼等が島に滞在中、Cope が訪ねて来て、皆でヨット遊びに出掛ける。しかし、ヨットに乗っている間に海が荒れ始めたため、Cope を除いて、皆が船に酔ってしまう。Cope は船酔いのために青ざめた Millborne と Frances の顔を見比べて、二人の顔立ちがよく似ていることに気づき、彼等の過去に謎があるのではと疑念を抱く。晩になって、彼は Frances に Millborne と Mrs Frankland は親戚関係にあるのかと尋ねるが、彼女はそれを否定する。

その後 Cope からの手紙が途絶えてしまい、Frances は不安を抱き始める。彼女は、ヨット遊びに出掛けた晩に彼が尋ねたことと、彼が手紙をくれなくなったこととの間に何か関係があるのかと母親に問い正す。母親は関係を否定するが、Frances の疑念はさらに深まる。Frances と Cope の婚約が危ういものとなった今、Mrs Frankland は Millborne を激しく責めるようになり、やがて Frances に Millborne が彼女の父親であることを認めざるを得なくなる。

依然として Cope からは Frances に手紙が届かず、Millborne は妻と娘からの非難攻撃に、ただ無言で耐えている。やがて Millborne は Ivell という田舎町の近くにある古い小さな邸宅に引っ越しすることを提案する。London の生活にうんざりしていた妻と娘はこれに同意し、London で用事があるという Millborne を残して、一足先に引っ越しをする。新居は楡の木立に囲まれた美しい家で、二人はすっかりその家が気に入ってしまう。

London に残った Millborne は妻と娘に財産を分与する段取りを整えた後、一人イギリスを離れ、ベルギーの Brussels に移り住む。その夏の或る午後、イギリスの新聞に目を通していた彼は、娘が Cope とめでたく結婚したことを知る。

III 論考

小説の題名は多かれ少なかれ、その作品のテーマや主要な要素を暗示し、読者の〈読み〉を導く傾向がある。本作品は、*For Conscience' Sake* (『良心ゆえに』)

という題名が示唆する 'conscience' の問題が冒頭で提示され、物語は繰り返し用いられる conscience という言葉に導かれるかのように展開して行く。conscience という言葉は、確かに本作品を理解する上で、一つの重要なキーワードではあるが、この言葉は題名に用いられているが故に、読者の読み方を規定し、本作品を単純に〈良心の問題〉を扱った作品であると理解し納得させてしまう嫌いがある。そこでまず conscience という言葉を検討することから、本作品について論じてゆきたい。

(1) conscience (良心) について

conscience という言葉は現代でも広く一般的に用いられているため、本作品を読む時に、その言葉そのものが持つ社会・文化的な意義にまで思いを巡らす読者は稀であろう。しかし、*For Conscience' Sake* という作品を読む場合、conscience という言葉が19世紀のイングランドでどのような社会的、文化的意味合いを持っていたかをまず考慮する必要がある。Kristin Bradyは、'for conscience's sake' という言葉が、Hardy の小説に登場する人物達によって、道徳的な行動ではなく、慣習的な行動を正当化するために繰り返し使われていると指摘し、次のように述べている。

This repeatedly ironic use of a common Victorian cliché points to the important place of the word 'conscience' in the propagation and enforcement of nineteenth-century social conventions.²⁾

つまりBradyは 'for conscience' sake' という言葉はヴィクトリア朝、つまり19世紀のイングランドではよく使われた常套句 (cliché) であり、Hardy がその言葉を繰り返し用いたことは、19世紀の社会慣習を宣伝・強化する上で、conscience という言葉が重要な位置を占めていたことを示すものであると論じているのである。確かに、conscience という言葉は19世紀のイングランド社会では、現代にはない独特の重みがあり、人々の行動に大きな影響を与えていたようだ。それは、conscience という言葉が、Millborne の行動を支配しただけでなく、Mrs Frankland の心をも動揺させ、ついには彼の求婚を受け容れさせる要因になったことからもうかがえる。そして、Hardy の conscience に対する立場は、懐疑的、或いは批判的なもので、*For Conscience' Sake* の物語の中で、conscience は人を幸福に導くというよりも、むしろ混乱に導く要因として扱われていることに注目したい。

また conscience という言葉については、物語の終結部で語り手が ‘…he had formerly weighted with bad conscience…’ (p.61) と、Millborne の conscience の性質を ‘bad’ と形容していることは興味深い。‘a bad conscience’ つまり「悪い良心」という言葉は、矛盾した表現だからだ。なぜ Hardy はここでわざわざ ‘bad’ という形容詞を用いたのだろうか。それは、Millborne が conscience の問題にこだわったのは、単に社会的慣習に従っただけでなく、彼にそれを口実にした利己的な動機があったからである。

Millborne は昔捨てた女性が Exonbury という町で、Mrs Frankland と名乗って、娘とともに音楽とダンスの教師をしていることを知る。彼女は一人で娘を立派に育てあげ、町でも評判の良い住民として、親子ともども社会活動や慈善活動にも積極的に参加していた。もし Millborne に彼女を思い遣る心があったならば、彼女の平穏な生活に今になって介入することに、ためらいを感じたであろう。だが、彼の眼中には自分自身の事しかなかったのである。物語の最初の部分で、愛情があるわけでもないのに、昔裏切った女性を捜し出して過ちを償いたいと語る Millborne に対して、Bindon 医師が与える ‘You had better dismiss it from your mind as an evil past your control.’ (p.49) とか ‘But—after twenty years of silence—I should say, don’t!’ (p.50) といった助言は、世間一般の常識的な立場・ものの見方を表していると言って良い。従って、Bindon 医師の助言に反した Millborne の行動は、世間の一般的な通念に照らしてみれば、常軌を逸した行動であり、それは conscience という常套句で自己正当化した、極めて利己的なものだったと言えよう。

(2) Millborne の孤独

それでは、なぜ Millborne は利己的な行動に走ったのか。彼は Bindon 医師に次のように告白している。

‘I am a lonely man, Bindon—a lonely man,’ Millborne took occasion to say, shaking his head gloomily. ‘You don’t know such loneliness as mine And the older I get the more I am dissatisfied with myself.’ (p.48)

Bindon 医師に思わず漏らしたこの言葉には Millborne の本音が現れていると言って良い。つまり、彼が20年前に見捨てた女性を捜し出そうとする動機の根源には、深い孤独感があったのである。遺産を相続して、早々と引退した Millborne は、Bond Street に

ある行きつけのクラブに毎日規則正しく通っていたが、彼には親友と呼べるような友人は一人もいなかった。そして、歳を取るにつれて孤独感が増し、彼はそれに耐え難くなってきていたのである。Alan Hurst は *For Conscience’ Sake* について、‘Hardy shows great insight into Millborne’s loneliness and the differences between provincial life and life in capital.’³⁾ と述べ、Millborne の孤独について言及しているが、正鵠を射た指摘であると言えるだろう。また Hardy 自身、Millborne の行動に孤独感が深く関わっていたことを、語り手の次の言葉の中に示している。

His many intermittent thoughts on his broken promise from time to time, in those hours when loneliness brought him face to face with his own personality, had at last resulted in this course. (p.50)

要するに、Millborne が Mrs Frankland との結婚を望んだのは、いかんともし難い孤独感を解消するため、つまり利己的な理由からであって、良心の呵責というのは表向きの理由に過ぎなかったのである。

(3) デラシネとしての Mr Millborne

Millborne の孤独に関連して、さらに検討すべき事柄がある。それは、Millborne はデラシネ（根無し草）であって、彼の孤独はその事に由来しているのではないかということである。Millborne は Wessex 地方という田舎の出、つまり ‘country-born, a native of some place in Wessex’ (p. 47) であったが、若い時に故郷を離れて London の銀行に勤め、退職してからも故郷に戻ることなく、ずっと London に住み続けた。彼がデラシネであることを象徴的に表しているのは、彼には地域社会の一員としての存在感が全く感じられず、住んでいる土地との関係が極めて希薄であるということである。彼は London に長く住み、家を買うだけの財力があってもかかわらず、自宅を構えるよりも、下宿人として暮らすことを好み、Mrs Towney の家に部屋を借りて暮らしてきた。つまり Millborne は、London に約30年も住んでいながら、実際には London に根を下ろしてはいなかったのである。そして、下宿人である彼には自分の名前のついた表札はなく、‘... he lived inside the door marked eleven,’ (p.47) とあるように、彼の存在は「11」という番地の中に、つまり London という大都市の〈匿名性〉の中に埋没していたのである。

ちなみに、Millborne とは全く対照的に、しっかりと地域社会に根を下ろして暮らしていたのが Mrs Frankland である。Millborne が下宿生活をしていたのに対し、Mrs Frankland は故郷の Wessex 地方にある田舎の町 Exonbury にずっと住み続けていた。彼女とその娘は町の中心部に自宅を構え、よく磨かれた真鍮の表札には、二人の名前がくっきりと表されていた。彼女は ‘a recognized townswoman’ (p.51) であり、Millborne が London の匿名性の中に埋没していたのとは対照的に、娘と共に地域の様々な活動に積極的に参加し、町では ‘a typical and innocent pair among the genteel citizens of Exonbury’ (p.51) として、よく知られる存在だったのである。

(4) 〈田舎〉対〈都会〉

土地や地域社会との繋がりという観点から、Millborne と Mr Frankland を比較した場合、先に引用した Alan Hurst の言葉の中の ‘the differences between provincial life and life in capital’ が示しているように、さらに〈田舎〉対〈都会〉というテーマが浮かび上がってくる。

London で暮らすようになった Mrs Frankland と Frances は、華やかな大都会に来て最初に感じた興奮が冷めてしまうと、知人もいない London の生活が退屈でつまらないものに思えてくる。そして、Millborne の求婚を受け容れたことを後悔した Mrs Frankland は、次のように言う。

Bringing us away from a quiet town where we were known and respected—what ill-considered thing it was! O the content of those days! We had society there, people in our own position, who did not expect more of us than we expect of them. Here, where there is so much, there is nothing! He said London society was so bright and brilliant that it would be like a new world. It may be to those who are in it; but what is that to us two lonely women; we only see it flashing past! . . . O the fool, the fool that I was! (p. 59)

Mrs Frankland は London での生活にすっかり嫌気がさし、故郷を出て来たことを深く後悔している。彼女にとって、幸せに暮らせる場所、安住の地は故郷の町 Exonbury なのである。ちなみに、*Life's Little Ironies* に収められているもう一つの短編小説、*The Son's Veto* (1891) でも、牧師の夫とともに田舎の町

Gaymead から London に出て来た Sophy は、Mrs Frankland 同様、London の生活に馴染めず、故郷に強い郷愁を感じていた。彼女が幸せに暮らせる場所は故郷の Gaymead であり、London は埃っぽく、陰鬱で騒々しい所、また友人一人いない孤独な場所だったのである。

Hardy の作品の中で描かれている田舎、それは彼が Wessex と呼んだ田園地帯、或いはそこに散在する村や町である。そこには伝統的な風習や風俗が残っていて、人間関係も緊密であった。それに対して、London のような大都会は、その華やかさや喧噪とは裏腹に、人間関係が希薄な場所、特に田舎から出て来た者が強い孤独感を感じる所として描かれている。*For Conscience' Sake* の主人公 Millborne は若い時に故郷を離れ、London に出て来た。だが、20年も London に住んでいるとは言え、彼は本質的には Mrs Frankland と同様、田舎の人間であり、都会人にはなりきれなかったのである。彼の孤独は正にその事を物語るものである。Mrs Frankland とその娘 Frances は Exonbury という地域社会で充実した毎を送り、その生活は活気に満ちたものだった。それに対し、Millborne は大都市 London に埋没しているため、存在感が希薄で、その生活ぶりにも活気が全く感じられない。彼もまた、本来は故郷に帰るべき性質の人間だったのであろう。

(5) Mrs Frankland について

1882年12月、Hardy は Mrs. Cross という名の老女から、次のような実話を聞いている。恋人に裏切られ捨てられた娘が苦勞して子供を育て、逞しく生き、それなりに豊かな生活を送れるようになった。そんな折に、彼女を捨てた男が貧乏になって戻って来て、彼女に求婚したが、彼女はそれを断った。そして男は、結局、救貧院に入ったのだった。Hardy はこの話に感銘を受け、その女性を賞賛したという。⁴⁾ さらに、*Life of Thomas Hardy* には次のような記述がある。

The eminently modern idea embodied in this example—of a woman's not becoming necessarily the chattel and slave of her seducer—impressed Hardy as being one of the first glimmers of woman's enfranchisement; and he made use of it in succeeding years in more than one case in his fiction and verse.⁵⁾

つまり Hardy は、話に聞いた女性の男性に隷属し

ない生き方に、つまり彼女の自立した生き方に、〈女性解放の最初の兆し〉を感じ取り、詩や小説の中で幾度かそのような女性の新しい生き方を取り上げたという。そして *For Conscience' Sake* の Mrs Frankland は、Hardy が描いた、男性から自立して生きた女性たちの一人であると言えるだろう。20年ぶりに Millborne の前にその姿を表した Mrs Frankland は、身なりも良く、その物腰には〈威厳〉さえも備わっていたのである。

The woman he had wronged stood before him, well dressed, even to his metropolitan eyes, and her manner as she came up to him was dignified even to hardness. (p. 52)

For Conscience' Sake において、Millborne が活力を感じさせない、存在感の希薄な人物であるのに対し、Mrs Frankland は生き生きとした存在感のある女性として描かれている。Hardy は、恋人に捨てられながらも、独力で人生を切り開いていった Mrs Frankland の生き方に、強い共感を抱いていたのであろう。

(6) 結婚と階級意識

Hardy の多くの小説の中で、階級意識の問題は主要なテーマの一つになっているが、*For Conscience' Sake* においても、短編小説集 *Life's Little Ironies* に収録されている他の作品、*A Tragedy of Two Ambitions* (1888)、*To Please His Wife* (1891) および *The Son's Veto* (1891) などと同様に、階級意識の問題が大きなテーマとして扱われている。*Life's Little Ironies* について John Goode は、

The group of stories written by Hardy in 1891—which make up most of *Life's Little Ironies*, “The Son's Veto” for example, or “For Conscience' Sake”—represents class as an agent of sexual respectability and repression.⁶⁾

と述べているが、Goode の指摘は的を射たものだろう。実際 *For Conscience' Sake* では、階級、つまり社会的地位や身分が、結婚しようとする男女の体面に大きな影響を与え、彼等の行動を抑圧する重要な要因になっているからだ。

Bindon 医師との会話の中で Millborne は、20年前に結婚の約束を果たさなかった理由を次のように述べている。

Her position at the time of our acquaintance was not so good as mine. My father was a solicitor, as I think I have told you. She was a young girl in a music-shop; and it was represented to me that it would be beneath my position to marry her. Hence the result. (p. 49)

つまり、弁護士の子であった Millborne は、楽器店の店員をしていた娘との結婚を、自分の社会的地位を貶める、身分的に不釣り合いなものと思われ、彼女を捨てたのである。*For Conscience' Sake* の物語の発端は、Millborne のこのような階級意識にあり、それがなかったならば、この物語が存在し得なかったという意味において、階級意識の問題は作品の最も重要な要素であると言って過言ではないだろう。

また、Millborne との結婚を頑なに拒んでいた Mrs Frankland に、彼との結婚を決意させたのも階級の問題だった。彼等の娘 Frances には牧師補の Cope という恋人がいて、二人の間には、暗黙のうちに結婚の約束が交わされていた。しかし、Cope の友人の中には、身分の違い、つまり彼女と母親の職業を問題にして、二人の結婚に反対する者がいた。その事を知った Millborne は、Frances の縁談にかこつけ、Mrs Frankland の社会的な弱みにつけ込む形で、彼女から結婚の同意を取り付けたのである。

さらに、物語の転換点であるヨット遊びのエピソードにおいて、Cope の心を動揺させ、彼を Frances から遠ざけたのも、階級意識に関わる問題だった。Cope はヨットを操縦しながら、前に並んで座っている Millborne と Frances の船酔いで青ざめた顔を見比べて、二人の顔立ちが驚くほど似ていることに気付く。そして、Millborne 家には何か謎があるのではないかと疑念を抱き、Frances と結婚することに、ためらいを感じるのである。

The Franklands' past had apparently contained mysteries, and it did not coincide with his judgment to marry into a family whose mystery was of the sort suggested. (p. 57)

こうして、Mr Cope は Frances から遠ざかるようになるのだが、Kristin Brady は Cope の心変わりについて次のように述べている。

It is an added irony that Cope's temporary forsaking of Frances results not from her

professional status but from the questionable relation she bears to Millborne: . . .

. . . , Cope is less moved by a natural attraction to Frances than by his 'natural dislike' for her origins.⁷⁾

ここで Brady は、Cope が Frances から遠ざかったのは、彼女の職業よりも、その家柄を問題にしていたことだと指摘しているが、いずれにせよ、Cope は Frances の身分を問題にしているのであり、彼の行動が根強い階級意識に支配されていたことは確かである。さらにまた Brady は、

The courtship of Percival Cope and Frances Frankland provides an ironic parallel to that twenty years earlier of Millborne and Leonora. Both the young Millborne and his prospective son-in-law regard marriage as a choice that will influence their respective reputations.⁸⁾

と述べて、Cope と20年前の Millborne との間には、結婚についての意識の上で類似性があると述べている。これは非常に興味深い指摘であろう。つまり、*For Conscience' Sake* では、結婚をめぐる階級意識の問題が二世代にわたって繰り返し扱われ、物語の基調になっているからだ。

また Cope については、彼がキリスト教の聖職者であったことにも留意する必要がある。Hardy は多くの作品の中でキリスト教の聖職者の偽善性、非人間性を糾弾しているが、Cope もまた、例えば *A Tragedy of Two Ambitions* の Halborough 兄弟や *The Son's Veto* の Randolph といった聖職者のように、階級意識にとられ、寛大さや人間性に欠けた聖職者であった。もしも彼が気難しい人間ではなく、'A passionate lover of the old-fashioned sort' (p. 57) であったならば、Frances の出生や家柄を気にすることはなかったであろうし、Millborne 夫妻の結婚生活も破綻せずに済んだかも知れない。Hardy は Cope を声高に糾弾しているわけではない。しかし、Cope の職業を副牧師とし、彼の狭量な階級意識が物語の転換点を作り出しているという経緯に、当時のキリスト教の聖職者に対する Hardy の痛烈な皮肉が込められていると言えよう。

(8) 遺伝 (heredity) について

David Cecil は Hardy が〈遺伝〉に深い関心があったことを指摘して、'He was fascinated by the idea of

heredity. He loved to trace the family type continuous through generations.'⁹⁾ と述べ、特に注目すべき作品として、後期の小説 *Tess of the d'Urbervilles* (1891) と *The Well-Beloved* (1897)¹⁰⁾ に言及しているが、*For Conscience' Sake* においてもまた、遺伝のモチーフが用いられ、重要な役割を果たしていることに注意すべきである。

Millborne 一家が休暇で訪れた Wight 島でのヨット遊びの場面は、物語の転換点となる重要な場面である。船酔いのために青ざめてゆく Millborne と Frances の顔に、平素の顔色の時には認められない類似性、一族に独特の共通する特徴がだんだんと、しかもくつきりと浮かび上がってくる。

Nausea in such circumstances, like midnight watching, fatigue, trouble, fright, has this marked effect upon the countenance, that it often brings out strongly the divergences of the individual from the norm of his race, accentuating superficial peculiarities to radical distinctions. Unexpected physiognomies will uncover themselves at these times in well-known faces; the aspect becomes invested with the spectral presence of entombed and forgotten ancestors; and family lineaments of special or exclusive cast, which in ordinary moments are masked by a stereotyped expression and mien, started up with crude insistence to the view. (p.56)

こうして、Millborne と Frances の顔に表れた特徴、その類似性が、二人の血の繋がりを Cope の目の前で雄弁に物語ることになるのである。Hardy は若い頃から遺伝について興味を抱いていたようだが、この作品が書かれた当時、つまり小説家としての円熟期に、遺伝というモチーフを特に強く意識して用いたようだ。F. B. Pinion は、'During his last years as a novelist Hardy emphasized the importance of heredity more persistently.'¹¹⁾ と述べて、当時 Hardy が遺伝の重要性を以前にも増して強調していたと論じている。

〈遺伝〉についてはまた、1917年11月30日に Macmillan 社から出版された Hardy の五番目の詩集 *Moments of Vision* に収録されている、文字通り "Heredity" という詩を参考のために引用しておきたい。

Heredity

I AM the family face;
Flesh perishes, I live on,
Projecting trait and trace
Through time to times anon,
And leaping from place to place
Over oblivion.

The years-heired feature that can
In curve and voice and eye
Despise the human span
Of durance—that is I;
The eternal thing in man,
That heeds no call to die.¹²⁾

(訳) 我輩は一族の顔である
肉は亡びる。我輩は存続する
時を貫き、また別の 様ざまな時に
特徴と痕跡とを投射し
忘却をもひとまたぎして
場所から場所へと跳び越えて行く

身体の曲線や、声や眼のなかに住んで、
人間の命ながらえる期間を
せせら笑うことのできる 長年間相続された
その特徴—それが我輩である
死ぬという呼びかけにも耳をかさない
人間のなかの永久なるもの。¹³⁾

遺伝を擬人化して、簡潔に、そして明快にその特質を表現しているこの優れた詩は、Hardy の遺伝に対する関心の深さをうかがわせるものとして、非常に興味深い作品である。Hardy は *For Conscience' Sake* のヨット遊びのエピソードに、この遺伝のモチーフを極めて巧みに、効果的に織り込んでいるが、Millborne と Frances の顔に一族の特徴が徐々に表れてくる様子を描いた文章は白眉で、小説家として円熟期にあった Hardy の面目躍如たるものがある。

IV 結語

For Conscience' Sake を吟味した結果、本作品には Hardy の他の作品でもよく取り上げられているテーマやモチーフが重層的に織り込まれていて、Hardy の長編小説に共通する多義的な構造が見られることが分か

った。したがって、本作品は内容においても分量においても、Hardy の長編小説の一つの凝縮版と言って良く、Hardy の短編小説作家としての力量も遺憾なく発揮されている。読者は本作品を精読することにより、Hardy の長編小説のエッセンスに触れると同時に、彼の短編小説の魅力を再評価し、Hardy の文学をより良く理解することが出来るだろう。

For Conscience' Sake については既に多くを論じたが、最後にも一言付け加えておきたい。それは、本作品が初老の男性を主人公にしているという点で、Hardy には珍しい作品であるということ、そして、物語の最後で Millborne が Mrs Frankland に宛てた手紙の中で示している諦観、つまり過去の出来事は修正不可能であるという諦観を、Hardy 自身が共有していたのではないかということである。Hardy は人であれ、建築物であれ、また土地であれ、何事についても過去を良く記憶し、それにこだわった作家・詩人であった。そのような Hardy であれば、本作品の執筆時に50歳、つまり当時では初老と言われる年齢に達して、過去がもはや手の届かぬものであることを慨嘆する時もあったであろう。Millborne の人物造形には、Hardy のそのような想いも投影されているのではないだろうか。

註

テキストは *Life's Little Ironies and A Changed Man* (The New Wessex Edition; London: Macmillan, 1977) を使用。頁数のみを表示してある引用は上記テキストからのものである。

- 1) Richard L. Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (London: Oxford University Press, 1954), p.85.
- 2) Kristin Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy* (London and Basingstoke: Macmillan, 1982), p.113.
- 3) Alan Hurst, *Hardy: An Illustrated Dictionary* (New York: St. Martin's Press, 1980), p.59.
- 4) Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1962), p.157.
- 5) Florence Emily Hardy, *op.cit.*, p.157.
- 6) Dale Kramer (ed.), *Critical Essays on Thomas Hardy: The Novels* (Boston: G.K.Hall, 1990), p.34.
- 7) Kristin Brady, *op.cit.*, p.111.
- 8) Kristin Brady, *op.cit.*, p.111.
- 9) David Cecil, *Hardy the Novelist* (London: Constable, 1943), p.19.
- 10) *The Well-Beloved* では、同じ顔が Avice Caro という女性、その娘、そして孫娘へと、同じ名前と共に三代にわたって受け継がれている。
- 11) F.B.Pinion, *Hardy the Writer* (London and Basingstoke: Macmillan, 1990), p.334.
- 12) *The Collected Poems of Thomas Hardy*, The Fourth

Edition (London and Basingstoke: Macmillan, 1930), pp. 407—408.

13) 森松健介『小訂版 トマス・ハーディ全詩集Ⅱ』（東京：中央大学出版部，1999年），p.9.

Aspects of *For Conscience' Sake*

Michiyuki OHMOMO

Abstract : *For Conscience' Sake* is one of Thomas Hardy's short stories which have been rather underrated and paid much less critical attentions than his major novels. Its plot is quite simple and the story of Mr Millborne, the protagonist, can be summerized as a tale of a conscience-stricken bachelor of early old age who failed to right his past wrong. Written in the prime of Hardy's life, however, the work is not as simple as such a summary may imply. Indeed, close reading reveals that the work is skillfully interwoven with Hardy's major themes and motifs such as loneliness, class-consciousness, marriage, heredity, etc. At the end of the story, it becomes clear to Millborne that past wrongs can never be undone. It seems that Hardy, who was 50 years old when he wrote *For Conscience' Sake*, shares this view of life in a way. By reading this short story closely, one can gain a better understanding of Hardy and his literary world.

Key words : conscience, loneliness, class-consciousness, marriage, city